

マリガヤハウス設立 20 周年記念会参加ツアー報告

8月24日(金)～26日(日)までマリガヤハウス設立 20 周年記念会参加ツアー、26日(金)-28日(火)までダバオへのオプションツアーを開催しました。今年の参加者はマニラのみ参加は 10 名(スタッフ2名、子ども3名含む)で、マニラ・ダバオツアー参加が9名で合計 19 名の方が参加しました。

◆スケジュール◆

- 8月24日(金)、マニラ集合、マリガヤハウス訪問、オリエンテーション
- 8月25日(土)、マリガヤハウス設立 20 周年記念会参加
- 8月26日(日)、AM:解散、ダバオツアー参加者は国内線でダバオへ移動
PM:RGS-COW 事務所訪問、オリエンテーション、テーブルディスカッション
ホームステイ先へ各自移動
- 8月27日(月)、AM:ホームステイ先で過ごす。
PM:ホームステイの意見交換、ガーデンリゾート内散策、お買いもの
- 8月28日(火)、国内線でマニラへ移動、解散

参加者たちからの感想をご紹介します♪

◆最も印象に残っているプログラム&その理由

★感想

<マニラ参加者>

◆マリガヤハウス設立20周年会式典

(理由)JFCユースたちのパネルディスカッションがとても良かった。設立から20年のうちにユースが成長し、新たな日本とフィリピンのかげ橋となりつつあることを実感した。

★20年という長い間、マリガヤハウスが活動を続け、国内外から多くの参加者が詰めかけて20周年記念式典が盛大におこなわれたことに敬意を表します。ツアーのなかではあまりゆっくりお話できませんでしたが、クライアントのお母さんたちが式典のために団結し、尽力されてきたとうかがいしました。欲をいえば、パネリストのJFCやお母さんたちとも、ゆっくり交流する時間があるとうれしかったです。また来年以降の楽しみに、と思います。ダバオには行けませんが、後で参加した方からお話を聞き、とてもうらやましく思いました。

(野口和恵さん/フリーライター)

◆ユースのパネルディスカッション

(理由)「JFC」という共通の言葉を通してつながる若者が、それぞれの背景を語ることで、ひとくりにされない個人になれると思いました。それと同時に、個人の背景が違っていても彼らに共通するものがあるのは、個人ではなく社会に原因があるからだ、改めてわかりました。

★20年前からスタッフとして関わり続けている方たち、今のマリガヤハウスを支えるスタッフの皆さんとボランティアの皆さんには尊敬という言葉すらおこがましいと思いました。形の

ある「支援」や「寄り添い」を上回る覚悟と根気があったからこそ、JFCはここに存在し、声をあげることができたのだと思います。私自身JFCという言葉に出会ったのは大学生になってからで、それでも自分との繋がりが強すぎて平静でいられないことから、「日本に住んでるからね」と、距離をとることで取り乱さないようにしていました。それでもやっぱり自分がJFCである以上、この問題には関わり続ける必要があるし、わたしは自分の意思でJFCだと名乗りながら、この問題を多くの人と一緒に考えたいと思っています。そのためにも、まずはJFCがこれだけ存在していると発信すること、心無い言葉によって当事者が社会への信頼を失わないように、少しでも社会の空気を変えていくことも同時に必要だと思いました。

(三木幸美さん/＜公財＞とよなか国際交流協会職員)

◆JFCたちのパネルディスカッション

(理由) 自分の経験した様々なことを振り返り、親を憎む気持ちがないところにまで昇華させて、自分の人生を切り拓いていっている、その心の広さ、思いやりの深さ、そして困難に立ち向かう勇気と努力に心から感動しました。

★今回はマニラだけの参加でしたが、20周年記念会は大変印象深い、感動的な会でした。特に、4人のJFCたちのパネルディスカッションは、辛いこと、悲しいことなど多くの困難があったにもかかわらず、前向きに生きて、自分の人生を切り拓いていっている姿に、多くの希望をいただきました。こうしたJFCたちとお母さんたちの苦労を簡単に「わかる」というつもりはありません。しかし、今回話をうかがえたことで、まとめてJFCとはいっているけれど個性のあるひとりひとりの人生があることを深く理解でき、父親を知りたいという純粋な気持ちもひしひしと感じることができました。こうした純粋な気持ちや、個々人の努力を踏みにじらないように、私に何ができるか、自分の分野でできることは何かと問うた記念式でした。

また、JFC-netの活動を振り返り、「当事者」を置き去りにしない、継続することの重要性をあらためて実感しました。尚子さん、りえこさん、たくさん関わってきた方々、もう辞めたいと思ったことがあったかもしれませんが、ここまで続けてこられたからこそ今があるのだと思えば、継続の重要性と、サポートする側のケアや一休みできような仕組みをどのようにしたら作れるのかも私たちの課題なのかと考えた次第です。

みなさま、素敵なツアーの企画と実施ありがとうございます。そして、ツアーと一緒に参加をすることができたこと、参加者の皆様にも感謝しています。

(定松文さん/恵泉女子大教員)

◆20周年記念式典

(理由) たくさんの方が参加していたこと。式典をやりなれている感もありました。そこに歴史を感じました。式典のデコレーションは遊び(造花や風船)があり、よかったです。

★フィリピンの交通渋滞はあいかわらずで、クラクションもうるさいですが、妙に元気を感じました。いつもながら、JFCのお話には不条理を感じますが、人は強くなるものだとも思いました。林さんのあいさつ(2日目の夕食)が印象に残りました。林さんは、今後は贖罪のつもりでJFCネットワークに関わると言っていました。そんな方もいるんだと驚きました。林さんがツアーに参加した動機は、自分が雇用しているフィリピン人の背景を知りたいからと伺いました。JFCたちの話を聞いて、相手もいろいろ抱えている人間だと思ってくれたんじゃないかと思います。(斎藤忍/JFCネットワークスタッフ)

<ダバオオプションツアー参加者>

◆20周年記念会パネルディスカッションとダバオ・ホームステイでのJFCの話

(理由) パネルディスカッションでは、それぞれ壇上にあがったJFCが、いろいろ思うところはあるだろうに、率直に自分の辛かった経験を話してくれた。

ダバオでのJFCホームステイで、ボロボロになって顔も薄れてしまった父親との幸せだった写真を大事に大事にしてそれを見せてくれ、そして、父は自分を愛しているはずだ、と何度も繰り返す。日本での経験からアルコール依存症になって精神的にもうつ症状だという母も夜中話をしてくれた。実際の暮らしの場での語りにも少しでも接することができて、同じJFCといってもひとくりにできないのだと再確認させられた。

★マリガヤハウスで、河野尚子さんが、一日かけてJFCのママたちとじっくり「ライフ・ストーリー」を聴く→それだけでくたくたで、という話を聞いて、またマリガヤハウスの奥に、今まで扱ってきたケースごとの書類が(手書きか?) 両壁いっぱいにあるのを見て、感無量でした。ひとり一人をおろそかにせず、でもやれること、やれないことを鮮明にしつつ、誠実に彼女たちに向かい合っている尚子さんの姿が思い浮かぶようでした。これからもよろしくお願いします。そういう意味で、20周年記念会でパネラーとして一人一人の経験を、いろいろあるだろうに率直に語ってくれたJFCには、本当に心打たれました。

また今年も、ダバオのホームステイ先で、JFCと母とあれこれ話ができることがよかったです。特に雨季だったので、湿気と暑さを肌身で感じの、大事なことでした。

去年は戒厳令下だということでツアーが中止にまってしまいましたが、二年ぶりのダバオでは、ドゥテルテ大統領のお膝元でもあり、ジープニーは色鮮やかになり、人々は車の制限速度も厳格に守り、喫煙禁止も(厳罰化もあり) 厳しく守っているという印象でした。フィリピンの緩さをこよなく愛する私としては、かなり違和感が残りました。

(稲塚由美子さん/ミステリー評論家・ドキュメンタリー映像制作)

◆ホームステイ

(理由) 私のツアーの目的がクライアントの文化、生活に触れて相手を理解することだったため

★ホームステイ先は、兄弟のお家の一部を借りて生活している母子で、すべての生活ごとに対して、節約、倹約をしている印象を受けました。文化の違いや子育てに関する点から、仕事をしていない?できない?印象のお母さんでした。「また、お金のために日本に行って働きたい。今の生活では仕事はと何度も話されていました。「以前に日本で過ごしたときから、月日経ち世の中の流れが変わっていることを考えている?お子さんはどうするの?」と幾度となく聞くと、「大丈夫」と答える。いろんな考え方があって良いと思います。そのためにこれからの生活をどう設計するかと言う点は、まだこれからのようでしたが母子にとって最良の未来になることを願うばかりです。JFCのお母さんの話をじっくり聞くことが出来たこと、そしてツアーメンバーと尚子さん、シスターに感謝いたします。

(橋本瑞江さん/新潟ヘルプの会)

◆ダバオでのホームステイ

(理由) JFCとその母親の置かれている状況を生で体験できる機会はほとんどないので、印象に残っています。ダバオ空港のすぐ近く500を越えるバラックが並ぶスラム街があること、再開発のために立ち退きを迫られていること、ショックでした。

★とても有意義な旅行でした。マリガヤハウスの20周年記念の会、手作りの造花やおいしいミリエンダ、ともすれば重く暗くなるようなテーマを含んでいましたが、お母さんたちの心のこもったおもてなしに心が温かくなりました。「元チャイルド」の青年たちの話もとても良かったです。特にお母さんが精神的に疲れてしまっているなか、自らマリガヤハウスに支援を求めたという女性Aさんの話には感銘を受けました。現在横浜で英語の先生として活躍していると聞いて、さっそくfacebookで友だち申請しました。高校に在籍していJFCたちにも彼女の体験を聞かせたいと考えています。ひとつ提案したいのは（すでに実行しているかもしれませんが）今回の「JFC」の話を「現JFC」に広くシェアすることです。将来がなかなか見通せない子どもたちに「先達」の姿を見せて、努力すること、希望を持ち続けることの大切さを分かってもらえることが大切だと思います。

ダバオでのホームステイも貴重な体験でした。私のお世話になった家は、空港近くの細い川の畔に500軒近くのパラックが連なる地域の一軒でした。雨が降ると川が溢れて一面ぬかるみになってしまうという衛生面でも快適とは言えない状況。水道はなく、井戸水を汲み置き、トイレは柄杓で流し、同じ柄杓で水浴び、電気は通じているものの、プロパンは高いのでカセットコンロでしのぐ...。そんな生活の中でもおいしい食事でもてなしてくださいました。

再開発のためか、立ち退きを求められてるとのこと、家族とこの地域の方々のその後が気がかりです。

身近にフィリピンルーツの生徒もいることから、フィリピンには以前から興味を持っていましたが、なかなか行く機会がありませんでした。今回のツアーでは、自力ではなかなか訪れることができない場所にも行けて、とても満足しています。スタッフはじめ、他の参加者のかたがた、どうもありがとうございました。（舟知敦さん／高校教員）

◆20周年記念式典（8/25）

（理由）4人のJFCから、自分の人生やマリガヤハウスとの関わり等について、率直でとても力強い内容のスピーチを聞くことができました。JFCが置かれている状況について理解できただけでなく、マリガヤハウスが20年かけて継続してやってきたこと、その重み、また、JFCや母親達がサポートを受けながら人生に前向きに格闘していることが分かる、とてもよい内容だったと思います。また、多くのJFCの家族、支援者が集まっており、その繋がりや温かさも感じられて、本当によい式典だったと思います。

★当然のことかもしれませんが、フィリピンと日本とでの生活の差というものを実感しました。私は、弁護士として、日本で、離婚やシングルマザーの家庭問題等を扱っていますが、多くJFC家庭の困窮度合いは厳しいものがあり、家族の助け合いはあったとしても、行政の支援はほぼ期待できない、JFCを理由としたいじめがある等、二重三重の大変さがあるように思われました。

ただ、そうした状況にありながら、格闘し、時には楽しみながら、少しでも前に進もうとしているひたむきな母親達JFC達の様子がとても印象に残りました。

ホームステイ先の困窮した生活や考え方等から、希望が見えないように感じられたと感想を話された方もいて、それ自体大変重い事実ではありますが、それでも、少しでも生活がよくなるようにと努力をしていたことや、その支援を続けている方々の活動に頭が下がる思いがしました。

また、スタディーツアーに、さまざまなバックグラウンドを持つ多様な参加者が集まって

おり、その方々とのお話もとても面白かったです。数日間ではありましたが、いろいろな方面・知見からの意見を聞くことができ、多様な支援がありうるということを実感しましたし、お話が単純に楽しく、すごく刺激になりました。(松本佳織さん/弁護士)

◆パネルディスカッション

(理由) 同世代のJFCの想いや経験をシェアしてもらう事ができ貴重な経験だった。

★このツアーを通してJFCたちと出会い、直接彼らの想いを聞かせてもらうことができ感謝しています。今後もできる支援をしていきたいと思っています。(とくに、あすかちゃんとか) JFCネットワークやCOWの活動に感謝します。JFCのことを日本で伝えていきます。

(仁藤夢乃さん/一般社団法人Colabo代表)

◆ホームステイ

(理由) 母親が薬で刑務所、学校ではいじめにあい自殺未遂、さらに交通事故にあうという過酷な環境の中で、父親への期待を膨らませ、希望をもって生きようとする17歳の少女の姿に感銘を受けた。COWのシスターの支えで、神を信じながら前向きに頑張っている。彼女のために何かできることはないか、と大人として自分のできる範囲のことをしたいと思っている。

★JFCネットワークから20年を経て、日本国籍を得た若者たちが、日本への労働力として期待されている時代になっているということがよくわかりました。父親に会いたい、日本にいてみたいという純粋な思い、期待が、資本の論理に巻き込まれ、利用されるのは切ないです。

しかしフィリピンの貧困の状況を思うと、国籍を得たら日本で働き、家族を助けたいという気持ちもよくわかります。彼ら彼女らが人権が守られた環境で働けるよう、日本国内でも働きかけを続けなければと思いました。

とくにホームステイした18歳の少女はいま生徒9人の日本語学校に通い始めたというのですが、それがどんな学校なのか、非常に気になります。日本語を習得した先に何がまっているのか。彼女とは連絡をとって、この先も見守っていききたいと思っています。

(太田直子さん/フリー映像ディレクター)

◆20周年記念会

(理由) シンポジウムで大学院卒、大学卒、高卒と3者がシンポジストとして並び発言していたが、学問の大切さがよく分かる内容でした。問題点の洗い出しが出来なかったのは、行政マンと政治家が入っていないからで、メディアがないのも気になりました。(企業にとって恥部で、CSRで取り上げることもない。だからメディアに意識的に発信しなければ取り上げられない。)

★10年以上前、フィリピンに子会社を2社設立しました(制度上2社必要なので)。当社で働いていたフィリピン人を外向させたが、5年間で累積赤字を相当量出し、仕方なく閉鎖させることとなりました。現在は日本人を外向させて業績も回復、派遣従業員も4,000名を超えています。JFCはNGOでMBAの事業再生の手順を聞いても仕方ないでしょうが、一点だけお話しすると、彼らは社長さんになるのが目的で、社員の幸せ、お客様の成功、そして、3年先、5年先の会社のビジョンを提示する経営者の役割を果たさず、市場や経営環境など外部に会社の業績低迷の責任を求めようとなりました。どんな問題が起ころうが、たとえ天地変であろうが、業績の悪化は社長の責任です。赤字になるのは対策をとらなかった、もしくは対策が

間違っていたということで、これも社長の責任です。

ホームステイ先のお母さんは子どもは男の子3人、それぞれ父親が違います。1番上の子は13歳、お父さんは日本人です。子どもは日本に行きたい、お父さんに会いたいと言うが、会った後どんな未来を考えているのかと聞くと、具体的には何も考えていませんし、何の努力もしていません。早く親子を分離しないと依存症がどんどん伝染していきます。困ったものです。

認知をとる。国籍取得は大切ですが、目線を合わせて一緒に人生を考える。未来を考える。それにはまず、賢くなること、連帯することです。

(林隆春さん/株式会社アバンセホールディングス代表取締役)

◆プログラム：マリガヤハウス設立20周年記念会

(理由) 20周年記念式典でのパネルディスカッション。4人のパネリストの話がマリガヤハウスとJFCネットワークの存在意義を大いに示してくれたように思います。

★感想：マリガヤハウス20周年記念ということで、企画段階から一緒に取り組ませてもらったことに感謝します。10周年の時、私はマリガヤハウスでインターンをしていました。その年は改正国籍法施行直前の2008年。マリガヤハウスは、JFCの日本大使館での日本国籍集団申請を控えており、インターン含めスタッフみな準備に追われ、10周年のお祝いは大きくできませんでした。私の中では、その時の心残りがあり、今回盛大にお祝いすることができて、本当に嬉しく思います。20年間の“Maligaya=幸せ”が詰まった会になったと思います。日本にいるJFCや昔のスタッフやボランティアさんたちなど、もっと多くの方が会場でお祝いしたかったと思いますが、その人たちを代理して出席できて光栄でした。

ダバオでのスタディーツアーは、11年ぶり2度目の参加でした。1日目にはCOWのオフィスで、林さん、舟知さん、仁藤さんからそれぞれ日本での外国人の労働市場、外国ルーツの子ども教育、そして性的搾取の被害に合う若者の現状について教えていただき、私自身も大変勉強になりました。ホームステイは唯一無二の貴重な経験となりました。私のホームステイ先は三世代が同居していたので、それぞれとお話しでき、法的地位だけではないJFCの社会的背景について再考する機会となりました。2日目、ホームステイ終了後には参加者の皆さんと感想を共有し、それぞれのホームステイ先の家庭環境の複雑さと多様さから、一面的にこの問題を見ることはできないということを再確認しました。また、JFCネットワークのスタディーツアー参加者は、いつもみなさんプロフェッショナルでありつつ、フィリピンの明るい雰囲気すぐに適応されていて、参加者同士のわけ隔てない会話もとても刺激的でした。

私はダバオ滞在を1日延長し、2007年のスタディーツアーの際にホームステイをさせてもらった家族を訪ねました。当時小学生だったJFCがもう大学を卒業するとのこと。「日本国籍は取得したが、ジョブマーケットを日本に限定しているわけではない。エンジニアとしてきちんと雇用してくれる場所で働きたい」と語ってくれました。立派に育った姿に時の流れの早さを感じつつ、JFCネットワークとCOWが与えてくれた出会いに改めて感謝しました。

事務所を守り、クライアントさんたちのために日々お仕事をされているスタッフの皆様から敬意を表します。特に里枝子さんと尚子さんには、いつも元気と笑顔をいただき、ありがとうございます！今後とも多くの女性のロールモデルとして、ご活躍を期待しています！
(原めぐみさん/和歌山工業高等専門学校助教、ダバオツアー引率)